

第39回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSES) 大会報告

英文学科長 立石 浩一

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の推進を目的として設立された神戸女学院大学英文学会(KCELS)は、2011年度の第35回大会より名称を神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)と改称して5年目となります。本年度も、KCSESは例年通り11月の最終金曜日、28日に午後2時からL-28教室で開催されました。今回は言語コミュニケーションコースが学会準備を担当しました。

特別講演は、明海大学副学長・慶応大学名誉教授の大津 由紀雄氏をお招きし、『有識者会議に委員として参加して見えてきたことー「ことば」の不在と教育の両極化ー』という標題にてお話いただきました。現在「グローバル社会に対応する英語コミュニケーション能力養成」の旗印の下行われている英語教育改革が抱える問題点を的確にご指摘いただき、参加者よりも盛んに質疑応答がありました。大津先生には、大変貴重なご講演をいただき、心より感謝申し上げます。

研究発表では、本学大学院通訳翻訳コース修了生2名がご発表されました。まずは、岡田 奈知氏より『通訳者・翻訳者に対する社会的認識の変化と地方通訳者・翻訳者が担うべき役割について』の標題にてご発表いただき、その後、南野 やよい氏より、『大学学部生の英語運用能力向上を目的としたパラフレーズ訓練の実験的研究』についてご発表いただきました。

来年度、2015年度は英米文学文化コースが学会準備を担当し、第40回大会を開催予定になっております。今回の大会にご尽力くださった言語コミュニケーションコースの先生方、ご参加くださった皆様、及び日頃KCSESをご支援いただいている会員の皆様へ厚く御礼申し上げます。

特別講演

有識者会議に委員として参加して見えてきたこと
ー「ことば」の不在と教育の両極化ー

明海大学副学長・慶応大学名誉教授 大津由紀雄

本年2月から9月まで、文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議」に委員として参加した。その会議の議論などとおして、改めて鮮明に見えてきたことが二つある。1つは英語教育関係者の意識の中に「ことば (language)」という概念がほぼ完全に欠落していることである。この概念が欠落していれば、母語と外国語を有機的に関連づけることは不可能であり、ここに英語教育の不毛と混乱の根本的原因があると考えられる。もう1つは教育の両極化である。たとえば、大学レベルで言えば、一方にスーパーグローバル大学に代表される上位校があり、他方に母語の運用さえおぼつかない学生があふれる底辺校がある。英語力の面でもこの両極化は明白である。一方に日本の将来を担うべく、高度な英語運用能力をめざす(少数の)学生たちがおり、他方に就職先を得るためにTOEICのスコアの向上に汲々とする(大多数の)学生たちがいる。この講演では、この事実について語り、この抜き差しならない状態からの脱却のためになにが必要なのかを論じた。



発表要旨

大学学部生の英語運用能力向上を目的とした パラフレーズ訓練の実験的研究 南野やよい

このたび、第39回神戸女学院大学英語英文学会で、大学院博士前期課程でまとめた研究内容をご報告申し上げるといふ有難い機会を頂戴しました。

そこで、大学学部生の英語運用能力を向上させることを目的とした実験的研究の結果をまとめ、ご報告申し上げます。

私は英文学専攻通訳・翻訳コースに在籍しておりますが、通訳者養成訓練は一般的な外国語習得学習に応用されることがあります。そこで、通訳・翻訳コースで提供される通訳者養成訓練の手法を大学学部生の英語習得に結びつけることを課題といたしました。

通訳では、起点言語での発話の単語一つ一つの訳出ではなく、話者が起点言語で伝えたい内容を理解した目標言語への訳出が求められます。それには、発話文章の表層構造のみを理解するのではなく、深層構造を理解する必要があります。そのため、一つ一つの単語の聞き取りに集中する訓練ではなく、発話内容の意味を理解し、発話の言い換えをおこなうパラフレーズ訓練が重要となります。

このパラフレーズ訓練を英語学習者が行うことにより、文章の表層構造である単語の理解だけでなく深層構造にある意味の理解をし、それを文章化するプロセスが鍛えられると考えました。

そこで、本研究では、通訳者養成訓練のうちパラフレーズ訓練に着目し、パラフレーズ訓練が英語の運用能力を向上させるという仮説を立て、その検証を行いました。英語学習者がパラフレーズのプロセスを鍛えると、文章の理解速度が速まり、レスポンスまでの時間が短縮され、英語の運用能力が高まると考えたからです。運用能力の向上をはかる手段は、言い換えまでのプロセスに要する時間を計り、その時間が短縮されているかどうかを検証することとしました。時間が短縮されているということは、その学習者がより早く文の深層構造までたどり着き、それを言い換えているということであり、運用能力の向上を示すと考えました。

この仮説の検証にあたり、神戸女学院大学学部生31名に実験的トレーニングを実施。まず、被験者の学生全員に事前の英語レベル分けテストを行い、同等の英語力になる2つのグループに被験者を分けました。それぞれを実験群と対照群としました。約

2カ月にわたり10回、実験群にはパラフレーズ訓練を、対照群にはリスニング訓練を実施。

このトレーニングは授業やクラブ活動などで多忙な学生が継続的に取り組めるよう、インターネット上で提供しました。毎回のトレーニングのみならず、以前のトレーニングにもどり、自己学習で補習を可能としました。パソコンがあれば大学や家庭などで気軽に取り組めるものでした。

トレーニング後、事後テストを実施し、その結果を検証。事後テストの結果、実験群と制御群ともにリスニング力の向上が見られ、実験群のみにパラフレーズ能力の向上がみられました。また、回答に要する時間をはかったところ、時間の短縮がみられ、被験者の英語運用能力の向上が示されました。

この実験的研究結果の検証により、パラフレーズ訓練を大学学部生の英語運用能力向上に役立てることができる可能性を示唆しました。

英語英文学会では、自身の発表後、大津先生の特別講演を拝聴しました。第二言語教育のみならず、「ことば」の習得について示唆に富んだ内容で、今後の研究に活かしたいと感じる内容が多く感銘を受けました。

このような発表の機会を頂戴し、感謝の気持ちで一杯です。

以上

発表要旨

通訳者・翻訳者の社会的認識の変化と 地方通訳者・翻訳者が担うべき役割について

岡田奈知

通訳は、人間が自分の居住地以外の人々と交流したところから存在した人類最古の職業の1つである。通訳だけでなく翻訳・仲裁など、情報の最前線に立つ通訳者の身分を保証し、通訳者養成プログラムや試験制度が確立された時代もあった。

現在、通訳は神業と呼ばれる一方で、ボランティア扱いされることもある。語学ができれば誰でもできると誤解され、背景知識などが軽視されがちであるが、大学や大学院で通訳翻訳教育が行われる等、社会的認識は向上しつつある。

話者のメッセージを相手の文化に受け入れられる言語に変換する知識やスキルは、人類の平和的共存に不可欠である。それを可能にする起点/目標言語や背景知識は、高等教育でこそ扱える知的学びであり、国際社会や地元社会で大いに役立つ。

国際学会発表

* 別府恵子 氏

“The Significance of ‘Ghostly Presence’ in Henry James’s Stories: from the ‘Appearance’ to ‘the Real’”

スコットランド、アバディーン大学で開催の第6回ヘンリー・ジェームズ国際学会 “Henry James and the Material World” (2014年7月16-19日)にて研究発表。

* 石川有香 氏

“Gender Differences in Language use”

アラブ首長国連邦ドバイ、Midwest Tower Hotelで開催された2nd Global Conference on Linguistics and Foreign Language Teaching (2014年12月11-12日)にて研究発表。

“How gender influences L2 use”

チェコ、サマリク大学教育学部で開催されたSixth Brno conference on Linguistics Studies in English 2014 (2014年9月11-12日)にて研究発表。

* 栗栖和孝 氏

“Templatic truncation as evidence for parallelism”

日本、国際基督教大学で開催されたThe 7th Formal Approaches to Japanese Linguistics (2014年6月27-29日)にて研究発表。

* 高雅妃 氏 (本学大学院生)

“日本語と韓国語代名詞が示す心的距離の分析”

日本、国立国語研究所で開催されたThe 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (2014年3月22日)にて研究発表。

“韓国語・英語副詞の心的距離分析”

日本、法政大学で開催された日本言語学会第148回大会 (2014年6月7日)にて研究発表。

“Pragmatics of Korean Expressions of Psychological Distance”

アメリカ、University of California Los Angelesで開催された2nd Conference of the American Pragmatics Association (2014年10月17-19日)にて研究発表。

* 松尾 歩 氏

“Children’s use of morphosyntax and the number of arguments to infer the meaning of novel transitive and intransitive verbs”

アメリカ、ハーバード大学で行われたWorkshop on Children’s Acquisition and Processing of Head

Final Languages (CAPHL 2014) (2014年11月5日)にてポスター発表。

* 奥本京子 氏

“Method of Facilitation to Transcend Dualism: For North East Asia”

中国湖南省湘潭市湖南科技大学で開催された“戦争、衝突と非暴力化解”国際学術研討会 (2014年4月11-12日)にて研究発表。

“Peace and Conflict Studies: Methods of Facilitation to Transcend Dualism for North East Asia”

モンゴル・ウランバートル外務省で開催されたThe International Conference on Peace Studies in the XXI Century and Mongolia (2014年10月24日)にて研究発表。

“Challenging Historical and Political Conflict in Asia Using the Arts-based Approach: Opportunities That NARPI and Other Peace Trainings Offer”

日本、神戸学院大学で開催されたPeace as a Global Language 2014 Conference (2014年12月6-7日)にて研究発表。

* 田辺希久子 氏

“Developing the Capacity of Foreign-Language Learners in Japanese Universities Through Interpreting and Translation Education”

オーストラリア、The Brisbane Convention & Exhibition Centreで開催されたAILA World Congress 2014 (2014年8月10-15日)にて研究発表。

特別パネル「翻訳学と言語教育—複数のことばたち—」「翻訳学習者の経験をさぐる—TSとからめて—」

スロベニア、リュブリャナ大学で開催された14th EAJS International Conference (2014年8月27-30日)にて研究発表。

* 立石浩一 氏

“The Phonology of an Abstract Suffix for Eventual Evidentiality in Japanese”

台湾清華大学(National Tsing Hua University, Taiwan)で開催されたGLOW in Asia X (2014年5月24-26日)にてポスター発表。

“Perception of Prosodic Prominence and Boundaries by L1 and L2 Speakers of English”

Max Atria (Singapore)で開催されたInterspeech 2014 (2014年9月14-18日)にてポスター発表。(Gábor Pintér, Shinobu Mizuguchiとの共同研究)

***Vaage Goran 氏**

“The State of Boke- and Tsukkomi — interaction in the Kansai Region — On the Importance of Age, Status and Power”

スロベニア、リュブリャナ大学で開催された The 14th International Conference of the European Association for Japanese Studies (2014年8月27-30日) にて研究発表。

“関西在住大学生のボケとツッコミに対する意識調査”

日本、立命館アジア太平洋大学で開催された第34回社会言語科学会研究大会 (2014年9月13-14日) にて研究発表。

“東京と大阪のダイコトミー —アイデンティティ、ユーモア、社会言語学について—

フランス、アルザス・欧州日本学研究所で開催されたアルザス日欧知的交流事業日本研究セミナー：東京 (2014年9月22-23日) にて研究発表。

“ユーモアにおける外国語教育—日本語学習者外国人と英語学習者日本人のケースから—”

香港、香港大学専業進修学院港大保良社区書院で行われた第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム (2014年11月15-16日) にて研究発表。

***和氣節子 氏**

“Leap to a Better Self in Coleridge and Kukai’s Japanese Esoteric Buddhism”

日本、東京大学で開催されたNASSR Tokyo Romantic Connections (2014年6月14-15日) にて研究発表。

会員による出版紹介

◇別府恵子 氏

『心広き友人たちへ：四人の女性に宛てたヘンリー・ジェイムズの手紙』スーザン・E・ガンター編、共訳。別府恵子・難波江仁美訳 大阪教育図書 2014年10月2日、500項

◇奥本京子 氏

『いまこそ知りたい平和への権利48のQ&A：戦争のない世界・人間の安全保障を実現するために』

(平和への権利国際キャンペーン・日本実行委員会編著、共著、合同出版株式会社、2014年10月30日) pp. 16-19

『平和を考えるための100冊+α』

(日本平和学会編、共著、法律文化社、2014年1月15日) pp. 264-265

(アウグスト・ボアール『被抑圧者の演劇』(里見実、佐伯隆幸、三橋修訳、晶文社、1984年) 担当タイトル：「平和ワークにおける『紛争が顕現

する演劇』の意義)

『ガルトゥング紛争解決学入門：コンフリクト・ワークへの招待』

(ヨハン・ガルトゥング著、トランセンド研究会共訳・共監訳、法律文化社 2014年9月25日)

◇吉田純子 氏

「トウェインからコーミアの思春期小説へ」『マーク・トウェイン—批評と研究』13号、(2014年4月刊) pp. 60-66。

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、今年度も担当教員からの推薦による応募を受けつけた。全体では15名の応募があり、2月に英米文学、英語学、グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論文・プロジェクト集』(2015年度春刊行予定) に掲載する。

<個人情報保護のため割愛>

記念賞

2014年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

<個人情報保護のため割愛>

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3) に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



編集後記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESとして新たなスタートをきって以来、無事4年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

会員国際活動報告・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々のご研究のご発展をお祈りいたします。

KCSES Newsletter編集委員

(2014年度運営委員)

○Marcelo FUKUSHIMA ○白井由美子 ○立石浩一 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 30

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2015年3月発行